

2018年9月2日の説教（要旨）

聖書 ローマの信徒への手紙 4章 1～8節

説教 「罪をゆるされる幸い」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

人が義とされるのは行いによるのではない。ただ信仰による。人間の罪の現実を徹底的に語ってきたパウロは、「ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です」（3：21～22）と宣言しました。この御言葉はローマ書前半部の頂点をなす御言葉であるといつてよいでしょう。

パウロは、この福音が決して新しい説ではなく、昔から聖書が語ってきたことであることを、4章において主としてアブラハムの例を引いて語っていくのです。ユダヤ人たちは、自分たちは血肉においてアブラハムにつながっているのだという自信と誇りを持っていました。パウロ自身もユダヤ人ですから、同胞のユダヤ人たちが、自分の語る福音に対して、どこでどんな風に反発するかがよく分かるのです。それだけに、われわれの父はアブラハムだという人たちに、そのアブラハムの信仰はどうであったか、聖書は何と語っているかと語りかけるのです。

「もし、彼が行いによって義とされたのであれば、誇ってもよいが、神の前ではそれはできません」（2節）とパウロは言います。ユダヤ教のラビの伝承によると、アブラハムは律法全体を遵守したので、その功績を認められて神に義とされたのだという考え方があったのです。自分たちの先祖を、自分たちの立場から理想化し、美化して見ていたのです。しかし果たしてそうだろうか、とパウロは言うのです。

「聖書には何と書いてありますか。『アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた』とあります」（3節）。ここでパウロが引用しているのは創世記 15章の話です。アブラハム（最初はアブラムと呼ばれていました）は、「あなたは生まれ故郷、父の家を出て、わたしが示す地に行きなさい」（12：1）との御声を聞いて、神の召しに応じて旅立ちました。そしてカナンの地にやってきました。しかし、アブラハムは行く先々で試練にさらされ、挫折を経験します。飢饉のためにエジプトに逃れざるを得ないこともありました。そこでは、アブラハムは自分の身を守ろうとして妻を妹と偽ったため、妻がファラオの後宮に召し入れられるという危機がありました。けれども、神の介入によって、危ういところで難を逃れることができたのです。

そんなアブラハムに、神は改めて「恐れるな、わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう」と言われます。けれども、アブラハムとしては未だ子どもがいないという変わらない現実の中で、自分の家に仕えていた僕の一人を養子にして自分の跡を継がせるという現実的な手だてを考えていました。神の約束と現実との溝を自分なりのやり方で埋めようとしていたのです。しかし、主なる神はアブラハムに「その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ」と言わ

れ、彼を外に連れ出して「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。あなたの子孫はこのようになる」と言われたのでした。

アブラハムはその時、天を見上げて神を信じたというのです。このような神に対する無条件の信頼、その信仰を神は彼の義と認められたのでした。聖書がアブラハムの信仰として語っているのは、彼のそのような信仰です。具体的な生活の中で、人間的な解決が見えているわけではない中で、「恐れるな」と言われ、「私はあなたを祝福する」と言われる神さまを信じ、神に望みを置くのである。

アブラハムの信仰がそういうものであるなら、アブラハムの側には神に対して何ら誇るべきものがないはずで、それでパウロは、アブラハムの功績に対して神が報いてくださったとする考え方に真っ向から反論し、アブラハムも不信仰で欠け多い人間であったと言い、「不信心な者を義とされる方を信じる人は、働きがなくても、その信仰が義と認められます」と言うのです。神は不信心な者を義とするお方であり、ただ恵みとして、その人の信仰を義と認められるのです。

同じことを、パウロはダビデを証人に引き出して語ります。「不法を赦され、罪を覆い隠された人々は、幸いである。主から罪があると見なされない人は、幸いである」。これは詩編 32 の冒頭の聖句です。詩編 51 と並んで有名な悔い改めの詩編です。いずれもダビデの生涯で忘れ去ることのできない姦淫と殺人の事件を思い起こさずにおれない詩です。罪の呪いのどん底に喘ぎ苦しむ詩人の上に、神がその不義を負わせられることなく、その罪を赦し、罪を覆い隠してくださったことを魂の底から感謝し讃美している詩なのです。

罪は消そうとして消えるものではありません。私たちの一部となって染み込んでいるのです。だから、人間の罪の解決の方法はただ一つ。神が憐みをもって覆ってくださることだけです。そのために、罪なきキリストが十字架上で、罪人として、私たちに代わって、血を流されなければならなかったのです。

「不法が赦され、罪を覆い隠された人々は、幸いである」。本当に幸いな人とはこの神の義、イエス・キリストによって私たちの罪を審き、かつ私たちの罪を覆ってくださる神の義を信じることのできる人なのです。

アブラハムは望みえないのに望みつつ信じました。ダビデも自らの深い罪が覆われることを信じました。パウロもその同じ信仰に生きたのです。聖書は一貫して一つの信仰を説いています。主イエス・キリストによって、神の前に義と認められているという恵み、その恵みを畏れ、喜び、感謝する信仰に生きてまいりましょう。